国際交流

記録文集

International Exchange Record

2021

国際交流

目次

『国際交流記録文集』第13号　発刊に寄せて　奈良学園大学　社会・国際連携センター長　善野　八千子

『ポストコロナの国際交流』学長の挨拶　奈良学園大学　学長　辻　毅一郎 …… 1

蘇州科技大学文化交流

令和3年度奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）プログラム …… 2

奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）
～コロナ禍でも交流の歩みを止めないために～　人間教育学部　准教授　山田　明広 …… 3

奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）
～ICTの可能性を活かして国際交流を～　人間教育学部　講師　オチャンテ・カルロス …… 4

水と教育　人間教育学部　梅﨑　竜亮　PPT …… 5

環境に関する奈良の取り組み　PPT　人間教育学部　中谷　都愛・原田　真奈 …… 6

日本における教育とSDGs ～質の高い教育をみんなに～　PPT　人間教育学部　田中 佐和子・永江　二菜 …… 7

人権について ～誰1人取り残さない人権の尊重を～　PPT　人間教育学部　平田 マユミ・松田　蒼史 …… 8

奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）事後レポート
人間教育学部　梅﨑　竜亮・原田　真奈・田中 佐和子・永江　二菜・平田 マユミ・松田　蒼史 …… 9

東アジア文化交流研修

第11回　東アジア文化交流研修（オンライン）プログラム …… 11

東亜大学校とのオンライン文化交流会　人間教育学部　教授　青山　雅哉 …… 12

令和3年度東亜大学校との国際交流会を終えて　保健医療学部　教授　堀内 美由紀 …… 13

海の豊かさを守ろう-海の生き物たちに居場所づくりを-　PPT　人間教育学部　横山 菜摘 …… 14

食品ロス　PPT　人間教育学部　黒木　拓斗・尾川　涼夏 …… 15

学校の多様性　PPT　人間教育学部　守安　桃代 …… 17

SDGsとICT教育　PPT　人間教育学部　井上　祐 …… 18

在留外国人の健康＆外国人看護師との協働　PPT
保健医療学部　西平　多瑛・山口　夢輝・木下　紗希・関谷　奈々・森　美由貴 …… 19

東アジア文化交流研修（オンライン）プログラム事後レポート
人間教育学部　横山　菜摘・黒木　拓斗・尾川　涼夏・守安　桃代・井上　祐、保健医療学部　山口　夢輝・進藤　晃彰・西平　多瑛 …… 20

編集後記 …… 24

『国際交流記録文集』第13号　発刊に寄せて

2020年度以降、コロナ禍収束に向けた多大な叡智と経費が世界規模で注力されて2年目を迎えました。しかし、2021年度後期までも、待ち望んでいた海外でのフェイスツーフェイスの現地研修を中止せざるを得ない状況が継続しております。

これまで連綿と続いてきた特別聴講生の来日も叶わない今、改めて本学の国際交流の在り方が問い直されています。

2021年度度は、2つの連携大学とオンライン交流会を開催致しました。一つは新たな取組として、蘇州科技大学（中国）とのオンライン交流が実現しました。もう一つは、昨年度からオンライン交流として新たな扉を開いた東亜大学校（韓国）との2年目の取組です。

いずれもテーマは、「グローカルSDGs」としました。

ここで、この社会・国際連携センターが再編された2018年に打ち出した「グローカル」と言う言葉について再確認したいと思います。

「グローカル」の語源は「Think Globally, Act Locally.（地球規模で考え、地域で行動せよ。）」だと言われました。その言葉どおり、世界の視点から自分の地域での行動を考え直すという文脈で使われることが多く、グローバルからローカルへという、いわば一方通行の傾向が強かったのではないかとも言われています。その後、情報技術の進歩や経済環境の急激な変化等により、ローカルな課題をグローバルな視点から考えることは当前のこととなり、グローバルとローカルを切り離せない課題が注目されるようになりました。

そして、グローバルとローカル、双方の視点を自由に行き交い、グローバルとローカルの自分の課題を見つけ出し、解決に向けて努力するという、真の意味で「グローカル」な資質・能力を備えた人物が求められています。

今回のオンライン交流会のテーマはまさに「グローカルSDGs」として、未来を担い築いていく学生同士の交流は、2030年の未来を見据えた具体的な地域の取組や個々の生き方・考え方について、異文化理解もふまえた意見交換をする機会となりました。

画面上では、のべ200名の参加者の笑顔が最後にあふれたことは、関係の皆様の多大なご理解とご協力に支えられての貴重な一コマでした。誠にありがとうございました。

この世界規模のパンデミックは、教育機関に限らず広くコミュニティや家族にも多大な影響を与え続けています。共に乗り越えて、日常的で継続的な小グループや共通テーマでのオンライン交流などの新たな展開の工夫等も模索して参りたいと考えております。

最後になりましたが、本年度の社会・国際連携センターの活動に御協力頂きました皆様、また継続して、各学生の指導に温かい配慮と支援に誠心誠意あたられた本センター運営委員・構成員並びに職員各位に深く感謝致します。

奈良学園大学　社会・国際連携センター長
人間教育学部　教授　善野 八千子

ポストコロナの国際交流

奈良学園大学　学長　辻　毅一郎

奈良学園大学では、外国からの留学生を受け入れるプログラムとして、半年あるいは一年間の短期留学プログラムのほか、夏季の3週間日本語を勉強しつつ奈良・京都など日本の伝統的文化に触れることのできる夏季日本語研修プログラムを、主として東南アジア諸国の大学生を対象に提供してきました。また本学の学生には、カンボジア・メコン大学と連携して行うカンボジア研修、セブ島に出かける語学研修、東アジアの大学との文化交流プログラムなどを用意し、多くの学生が海外との交流に参加してきました。しかし、ここ2年以上にわたるコロナ禍で、海外からの学生の受入れと本学学生の海外への派遣をすべて中止としなければならかったのは本当に残念です。

このような状況のもと、社会・国際連携センターでは、協定校やこれまでのプログラムに参加された方々と連絡を取り合い、先ずは蘇州科技大学との間でオンライン交流会が実施されました。その後、別途、韓国東亜大学校との間でもオンラインの東アジア文化交流会が実行されました。どちらもSDGsへの取り組みをテーマとして成功裡に執り行われ、とくに後者では152名という多くの参加者があったことを大変嬉しく思っています。交流会の実施に尽力された双方の先生方、参加された学生・教職員の皆さん、外部メディアから参加され貴重なコメントをしていただいた方々に敬意と謝意を表します。この文集では、これらのオンライン交流会に参加した学生による交流の様子を取りまとめた報告が掲載されています。

インターネットを通してあらゆる機器が繋がる時代となりました。オンライン授業も、ハイブリッドあるいはハイフレックスと呼ばれる方式など様々な授業形態が工夫されてきて、学生が授業の形態を選べる状況になってきています。また、いわゆる単位互換制度もオンライン授業であれば外国の大学との間でも実質化できるでしょう。ポストコロナの高等教育は大きく変化しそうです。そのような中で、対面で行うことが必要とされるのはどのような科目なのか、授業科目間でその特徴付けが進んできているのではないでしょうか。

一方、この文集から、オンライン交流会だけでも外国の方々と触れ合う貴重な機会となることがよく分かりました。世界で共有するSDGsをテーマに取り上げたことで、国内外においてこの問題に多くの人々が真摯に取り組んでいること、そしてその取り組み方も様々であることが理解されたのではないでしょうか。ただ、やはり、学生の海外研修は実際に現地に行き、対面で交流することが極めて重要と思います。異なる環境で育った人々が互いに出会い、友達になり、相互理解を深めることが、様々な問題を解決に導くための第一歩であることに間違いないからです。

残念ながら、日本は現在、外国からの留学生の入国に厳しい制約がかかっていて、日本への留学を望んでいる方々の来日が思うようにできない状況が続いています。コロナ禍が速やかに終息し、フェイスツーフェイスのコンタクトが可能となるようにと願っております。

令和3年度奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）

日　時　2021年10月25日（月）　11:00～12:30　（中国現地時間　10:00～11:30）

進行方式　ZOOMによるオンライン交流

テ ー マ　グローカルSDGs（全球視角下的地区可持续发展目标）
※SDGsというグローバルな目標について，自分自身，大学および周辺地域といった身近な（ローカルな）取り組みを取り上げ，発表・討論する。

◎司会：山田明広（奈良学園大学人間教育学部　准教授）

1. 両学よりあいさつ（6分）

辻　毅一郎　（奈良学園大学　学長）
呉　恵芳　（蘇州科技大学国際合作交流所　所長）

2. 交流会趣旨説明（2分）

オチャンテ・カルロス（奈良学園大学人間教育学部　講師）

3. 両学学生紹介（2分）

4. 発表と質疑応答（60分）

奈良学園大学（7名）⇒4グループ
蘇州科技大学（6名）⇒6グループ
計10グループ

発表順番		
1.	発表者：梅﨑　竜亮 テーマ：「水と教育」	（奈良学園大学）
2.	発表者：周　姬雯 テーマ：「故郷の上海の持続可能な発展」	（蘇州科技大学）
3.	発表者：中谷　都愛・原田　真奈 テーマ：「環境に関する奈良の取り組み」	（奈良学園大学）
4.	発表者：沈　芸糸 テーマ：「故郷の無錫における SDGs」	（蘇州科技大学）
5.	発表者：楊　雲聰 テーマ：「グローカル SDGs と私の故郷」	（蘇州科技大学）
	※質疑・応答その1	
6.	発表者：胡　盈盈 テーマ：「中国国内における SDGs への取り組み」	（蘇州科技大学）
7.	発表者：田中　佐和子・永江　二菜 テーマ：「日本における教育と SDGs ～質の高い教育をみんなに～」	（奈良学園大学）
8.	発表者：楊　紀璇 テーマ：「故郷の SDGs」	（蘇州科技大学）
9.	発表者：平田　マユミ・松田　蒼史 テーマ：「人権について～誰1人取り残さない人権の尊重を～」	（奈良学園大学）
10.	発表者：王　瑜丹 テーマ：「私の故郷――シェア自転車に YES!」	（蘇州科技大学）
	※質疑・応答その2	

5. 討論とまとめ（10分）

6. 閉会のご挨拶・講評（10分）

善野八千子（奈良学園大学学長補佐、社会・国際連携センター長、人間教育学部　教授）

奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）
～コロナ禍でも交流の歩みを止めないために～

人間教育学部　准教授　山田　明広

2021年10月25日、本学と蘇州科技大学との間の記念すべき初となる一対一の交流会が「グローカルSDGs」をテーマにZOOM を用いたオンライン方式にて実施された。

本学は、2010年に蘇州科技大学と連携協定を結んで以降、2019年度まで毎年、蘇州科技大学から多くの学生を特別聴講生あるいは夏期短期研修生として受け入れてきた。しかし、コロナ禍のため、2020年度以降それが実施できなくなってしまっていた。

そんな中、コロナ禍だからといってこれまで深めてきた交流を止めるべきではない、何とか続けていこうという気運が両学において高まり、蘇州科技大学側からの呼びかけに応じるといった形で、今回のオンライン方式による交流会が実現したのであった。

交流会は、「発表と質疑応答」および「討論とまとめ」をメインに、本学からは7名の学生が、蘇州科技大学からは6名の学生が発表者として参加し、全部で双方合わせて36名の学生と教職員が参加することで実施された。

一つ目のメインである「発表と質疑応答」では、本交流会のテーマである「グローカルSDGs」について、つまり各発表者の居住地域あるいは自国におけるSDGsに関する取り組みについて、両校の学生により報告がなされた。発表内容は、環境や教育、貧困、動物保護、人権など多方面に及んでいたが、いずれの発表も焦点が絞られていて何を主張したいのかが掴み取りやすいものであった。

ところで、今回の発表に際して、本学の学生7名は、SDGsというしばしば耳にはするがまだまだなじみのない目標について深く学ぶため、また本番で効果的なプレゼンを行うため、およそ3カ月前から事前準備を行った。ただ、8月末から9月末までは、緊急事態宣言のために学生の本学への入構が禁止されていたため、オンラインで行わざるを得ず、しかも学生たちのスケジュールがなかなか合わなかったこともあり、この間の事前準備は特に難航した。10月に入ってからは対面で行えるようになったものの、やはり学生たちのスケジュールがなかなか合わず、本番まで間に合うのかと思わされるほどであった。しかし、彼らは直前まで何とか時間を作って懸命に取り組み、本番では何とか言いたいことが伝わる発表を行うことができた。

両校の学生たちによる発表が終わると、本交流会の総括として、また学生同士の交流の場として、もう一つのメインである「討論とまとめ」が「質疑・応答その2」と併せて行われた。蘇州科技大学からは日本での女性の地位向上に関する取り組みについて、本学からは中国におけるいじめの問題や中国における水道水の状況について質問が起こり、両校の学生はともに自分の知識や経験を振り絞り懸命に答えていた。さらに、本学の学生から、SDGsという目標達成のために両校共同でできることとして、今後コロナ禍が収束し、双方が行き来し合えるようになれば、互いの国にて木を植え合うのはどうかという提案も出された。このように、本交流会は、オンラインという制限がある中でも非常に活気のある交流がなされるなど、学生たちにとって刺激と学びの多いものとなった。

翌週11月2日に、本交流会の振り返りを行った。学生からはSDGsのことを深く学ぶことができて良かったとか、もっと中国のことを学んでおくべきだった、もっと交流したかったなどといった様々な意見が出たが、全員一様に今回の交流会を通して中国に対して抱いていた印象やイメージがプラスの方向へと変わったと感じていたようであった。これこそが本交流会を実施した大きな目的の一つであり、こうして何とか達成することができて、本交流会を開催した意義があったように思われる。

社会全体がますますグローバル化・多様化する中、本学の学生たちがより一層異なる文化や価値観に対して目を向け、理解し、そして、互いに認め合い、共存共栄し合えるようになることを願わんばかりである。

奈良学園大学・蘇州科技大学 文化交流（オンライン）
～ICTの可能性を活かして国際交流を～

人間教育学部　講師　オチャンテ・カルロス

本学の社会・国際連携センターが海外とオンラインで交流を行うことは2年目となった。これまでコロナ禍において様々な活動が制限され、遠隔でどのようにより良いものにするかを試行錯誤が続いている状況である。今回の蘇州科技大学と行った文化交流はこれまでと少し違った試みを行った。それは非常にタイムリーなSDGsというテーマをお互いに設定し、その上で文化交流を図ることであった。また、今回参加した奈良学園大学生との準備においてグーグルクラスルームを初めて導入したことである。

今回、設定したテーマ「グロカルSDGs」には多くの学生が初めて触れることとなり、特に身近なところからSDGsが設定している目標を意識することが本来の活動の一つの狙いであった。また、海外の大学生もどのように意識しているかも確認できる重要な機会だった。

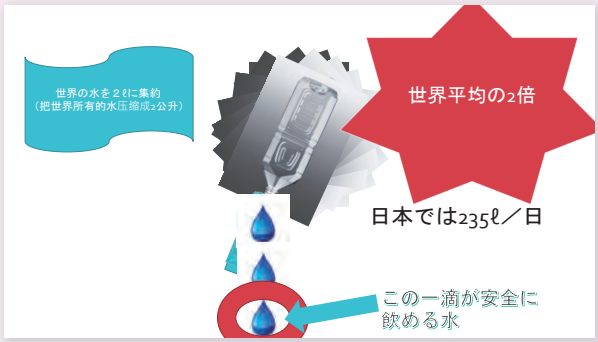
今回の交流会の事前準備（本学側）としてZOOMでミーティングを重ねました。またこれまでオンライン授業（本学）で使ってきたグーグルクラスルーム、スプレッドシート、グーグルフォームなどの利便性を活かしました。立ち上げたクラスルーム（画像1）では、遠隔で学生への連絡、資料の提供、発表のチェック、提出などの機能を使い、活動のマネジメントがスムーズに行うことができた。

今回のオンライン交流会は様々な制限の中、事前準備の段階からやむを得ず遠隔で準備をしなければならなかった。しかし、ICTの力を借りることで今後の活動及び交流会へのヒントとなったものが多く得られたと考えられる。例えば、今後、遠隔で海外の学生と交流できるような場所（グーグルクラスルームやSNS）をオンラインで設ければ、共同の学習や発表が実現できると考え、国境を越えてオンラインでいつでも交流が可能となる。

画像１　交流用グーグル・クラスルームのページ

水と教育 PPT

人間教育学部　1811519　梅﨑　竜亮



ご清聴ありがとうございました

感谢聆听ganxie lingting

参考文献
日本公共団体Unicef この汚い水を飲むしかない　最終更新日　2019―８・22
https://www.unicef.or.jp/special/o2sum/　（参照2021―10・8）
Sarastear日本と世界の水のいま　最終更新日　2018―６・２
https://www.sarastear.com/blog/b2094/　（参照2021―10・8）
Copyright 2021 gooddo マガジン　アフリカでの水汲みの問題点　最終更新日2021―9・4
https://gooddo.jp/magazine/water-and-sanitation/africa_sanitation/2147/　（参照2021―10・8）
Copyright 2021 gooddo マガジン　世界のトイレ事情　最終更新日2021―8・５
https://gooddo.jp/magazine/sdgs_2030/water_and_sanitation_sdgs/6126/　（参照2021―10・9）
日本公共団体Unicef　水と衛生　最終更新日　2020―9・3
https://www.unicef.or.jp/about_unicef/about_act01_03.html　（参照2021―10・9）

環境に関する奈良の取り組み PPT

人間教育学部 2011211 中谷 都愛
人間教育学部 2011260 原田 真奈

奈良県十津川村

面積…

672㎢

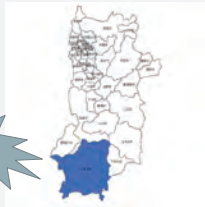
奈良県の約５分の１の面積を有する！

日本一大きな村！

正解は、③

問題 村の何%が森林でしょうか?
请问 村庄的百分之几是森林?

① 100% ② 57% ③ 96% ④ 14%



森林を守ることによって環境を守ろう
我们通过保护森林来保护环境吧！

SDGs １5〈陸の豊かさも守ろう〉

陸域生態系の**保護**、**回復**、**持続可能な利用**への推進、**持続可能な森林**の経営、**砂漠化**への対処、ならびに**土地の劣化**の阻止・**回復**及び**生物多様性の損失**を阻止する

SDGs１３〈気候変動に具体的な対策を〉

温室効果ガスの排出を原因とする**地球温暖化現象**が招く世界各地での**気候変動**やその影響を**軽減**する

十津川村の取り組み
～2030年に向けて～
十津川村向2030年进行的举措

十津川村の取り組み
～2030年に向けて～
十津川村向2030年所进行的举措

・多様な森づくりを行う

・森林の防災機能や生物多様性保全機能を向上させ、新たな管理システムを導入する

＊ 森林保全による防災機能強化 ＊

木を利用しよう

- 伝統の林業と森林を健全な状態で守り引き継ぐために、吉野木材を作った家を作って吉野材の利用を拡大している。
- ↓
- 木材を使うことで山の新陳代謝が促され、川上村の水質が保たれる

海の豊かさも守ることができる

私たちがこれからできること

○森林は私たちの生活に必要不可欠であると教える
○最近では、ＳＤＧｓの製品が増えているので、環境に配慮された製品を選ぶ

○緑の美しさ、森林のありがたさを感じる心を持つ
○紙類は、木を利用して作られているため、紙類の無駄使いをやめる

参考・引用文献

- 『十津川村SDGS未来都市計画』
https://www.vill.totsukawa.lg.jp/images/topics/1535589254/1535589254_1.pdf
最終閲覧：10.12
- 『持続可能な開発目標：SDGSの目標15「陸の豊かさも守ろう」のターゲットや現状は？
- https://goodde.jp/magazine/sdgs_2030/life_on_land_sdgs/
- 最終閲覧日：10.12
『気候変動から地球を守るために、今すぐ行動を起こそう』
https://www.unicef.or.jp/kodomo/sdgs/17goals/13-climate_action/
最終閲覧日：10.12
『森林破壊』
https://ideasforgood.jp/issue/deforestation/
最終閲覧日：10.12

日本における教育とSDGs PPT
～質の高い教育をみんなに～

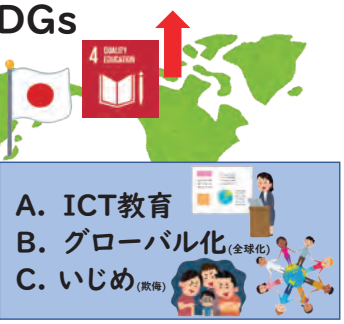
人間教育学部　2011206　田中 佐和子
人間教育学部　2011210　永江　二菜

日本における教育とSDGs
～質の高い教育をみんなに～
（日本的教育与SDGs～将高品质的教育提供给大家～）

NaraGakuenUniversity
Faculty of Humanistic Education

田中佐和子　永江二菜
Tanaka Sawako　Nagae Nina

日本におけるSDGs



2030年までに達成できるとされている

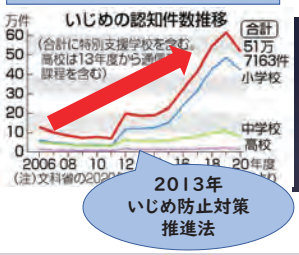
しかし…

Q.課題とは何でしょうか

A. ICT教育
B. グローバル化(全球化)
C. いじめ(欺侮)

C. いじめ

認知件数の増加



2013年
いじめ防止対策推進法

いじめが自殺につながる場合も…
（有时欺负会造成自杀）

原因

①異なるものを受け入れられない
（无法接受跟自己不同的事）

②ストレス解消
（解消压力）

相談できない児童が多い
（有很多学生不敢商量）

ボランティア活動
（学校支援志愿者活动）

今後

ご清聴ありがとうございました

参考

【スライド③】
子どもの自殺 初の400人超 不登校は19万人以上で過去最多
https://www3.nhk.or.jp/news/html/20211013/k10013305371000.html

【スライド④】
自分の子供がいじめに・・・7つの原因と安心して学校に通わせる対処法
https://best-legal.jp/children-bullying-9476/

人権について PPT

～誰1人取り残さない人権の尊重を～

人間教育学部　2111213　平田 マユミ
人間教育学部　2111307　松田　蒼史

蘇州科技大学文化交流プレゼン(10.25)

SDGs
(Sustainable Development Goals)
人権について
～誰1人取り残さない人権の尊重を～
（关于人权～无一例外地尊重人权～）

《Naragakuen University Faculty of Humanistic Education》
2111307 国語専修 松田 蒼史
2111213 小学校専修 平田マユミ

「人や国の不平等をなくそう」の課題と目標
（減少国内及国家间不平等）

もっともお金持ちの8人の総資産は、貧しい人達の36億人分と同じ!!
↓
お金持ちの人だけが有利な経済に
↓
先進国と途上国の間で格差があり不公平な貿易
↓
富裕層はさらに裕福　貧困層は貧困のまま
↓
フェアトレード
↓
公正な価格で取引
↓
より良い生活が送れる!!

FAIRTRADE

この情報はhttps://sdgs.city.sagamihara.kanagawa.jp/sdgs-17goal/10_reduced-inequalities/から引用しました

ワクチン接種による人権の問題
（接种疫苗所造成的人权问题）

・日本の社会に感染者への差別が「ある」との回答は88%!!
・感染症予防の効果と副反応のリスクを理解した上で自分の意志で接種
↓
・接種を強制したり、接種してない人に対して差別のない世界
↓
・市ごとに相談窓口を設置!!

今こそ、人と人とのつながりを。STOP!コロナ差別

この情報はhttps://www.yomiuri.co.jp/election/yoron-chosa/20210429-OYT1T50251/から引用しました

インターネットによる人権侵害
（通过互联网所发生的侵犯人权行为）

・名前や顔を簡単に知られなく発言ができる
↓
・その匿名性を悪用した人権侵害
↓
・ネット上から完全に情報を消すことは難しい
↓
・2019年ネットを利用した人権侵害の事件の数は1,877件
↓
・「インターネット人権相談受付窓口」や「人権110番」

この情報はhttps://www.gov-online.go.jp/useful/article/200808/3.html#a2から引用しました

女性の人権侵害

・女性への固定的な偏見や差別
↓
・配偶者からの暴力や職場でのセクハラ
↓
・男性の所得を100%とすると女性の所得は72.2%
↓
・日本の女性議員の数は調査国191ヶ国中166位
↓
・人権擁護機関による電話相談
・国連女性機関との連携

この情報はhttp://www.jinken-osaka.jp/knowledge/issue02.htmlから引用しました

LGBTによる差別（LGBT相关的歧视）

・職場や学校などで差別や偏見
↓
・誹謗中傷やいじめ
↓
・自殺者に占めるLGBT の割合は、24～34%にも達する
↓
・50カ国以上性に基づく差別が禁止
・29か国で同性婚が認められている
↓
・日本では未だ性への国の取り組みがない
↓
・LGBT平等法

L Lesbian　G Gay　B Bisexual　T Transgender

この情報はhttps://www.amnesty.or.jp/news/2021/0604_9208.htmlから引用しました

日本の外国籍の人口・出身は?

◆出身エリア・出身国別ランキング

	地域・エリア	人数	構成比
1	アジア	2,614,310	84.01%
2	北米	215,171	6.94%
3	ヨーロッパ	78,990	2.74%
4	北米	73,585	2.55%
5	アフリカ	18,228	0.63%
6	オセアニア	14,738	0.51%
7	無国籍	847	0.02%

	国籍	人数	構成比
1	中国	786,830	27.26%
2	韓国	426,860	15.06%
3	ベトナム	425,425	14.57%
4	フィリピン	282,023	9.77%
5	ブラジル	211,239	7.32%
6	ネパール	95,367	3.30%
7	インドネシア	66,084	2.29%
8	台湾	56,934	2.00%
9	米国	57,214	1.98%
10	タイ	53,344	1.85%

この情報はhttps://university.globalpower.co.jp/134886/#:~:text=%20から引用しました

日本語指導は?

この情報はhttps://ueric.uchida.co.jp/index.cfm/14,3349,50,html から引用しました

三重県伊賀市での学習状況

▶ささゆり教室
▶夏休みに行われる学習支援
▶外国国籍児童への講演会

https://www.mie-sfa.jp/?p=179 https://www.ipspunet.co.jp/2019/10/28/19478/

SDGsクイズ②「いじめ」（欺负）

2013年に日本は「いじめ防止対策推進法」が施行されたが、いじめの件数は6年連続で過去最多になっており、2020年のいじめの認知件数は『□』である。

①13万7391件
②61万2496件
③5万2581件

正解は②61万2496件
・都道府県・市町村による連携

この情報はhttps://www.nippon.com/ja/japan-data/h00855/から引用しました

ご清聴ありがとうございました!!
Thank you for listening !!
感谢聆听!!

奈良学園大学・蘇州科技大学文化交流（オンライン）事後レポート

2111213　平田 マユミ

蘇州科技大学との交流会のメンバーになったばかりの時は、準備するのに色々と戸惑ったりどのように発表するとよいのかわからなかったりして、不安でいっぱいでした。また、もともとSDGsについては知らないことばかりでしたので、先輩たちの内容豊富な事前発表を見て圧倒されてばかりでした。しかし、交流会本番に近づくにつれて、SDGsに対する知識も増え、またどのようにすればより伝わりやすいのかなど自分で考えることができるようにもなりました。さらに、蘇州科技大学の皆さんと実際に交流することで、環境や貧困といった中国が抱える問題とそれに対する取り組みなど、中国についても自分の知らなかったことを様々知ることができました。このように、この交流会に参加することで、自分の成長につなげることができ、よい体験になりました。

2111307　松田　蒼史

蘇州科技大学との文化交流を通して得たことは、中国という国やさらに中国の人について知ることができたということである。蘇州科技大学の学生の皆さんは、とてもしっかりした日本語ではきはき話しており、彼らの発表はオンライン越しでもはっきり聞き取ることができた。私は違う言語で話すのがとても苦手であるため、彼らの姿を見習いたいと強く感じた。また、違う国の人に向かって発表するのは私自身初めてであったため非常に緊張したが、落ち着いてゆっくり話すように工夫することでなんとか無事に蘇州科技大学の学生の皆さんに伝えることができた。たとえ生まれや文化が全く違っていようとも、こうしてお互いに歩み寄ることによって共にコミュニケーションを取り合うことができるということをこの交流会に参加して改めて感じた。もし対面で出会うことができていたらと思うとどうしても少し残念な部分はあるが、この交流会に参加できたことは学生のうちにしか経験できない貴重な経験の一つとなった。

2011206　田中 佐和子

私はこの交流会に参加することによって主に二つのことを学んだ。

一つはSDGsについてである。この交流に参加するまでは、SDGsという言葉を聞いたことはあったものの、どのような目的があるものなのかは知らなかった。だが、詳しく調べていくうちに、日本は目標4の「質の高い教育をみんなに」一つのみしか達成できていないということが分かり、日本にはまだまだ深刻な問題があるのだと気付かされた。

もう一つは中国と日本の現状についてである。日本には自転車をレンタルできるサービスがあるが、それが中国にもあると知るなど、中国についてこれまで知らなかったことを学ぶことができた。

この交流を通して、中国の現状と中国が抱えている課題について本当に多くのことを学んだ。私たちにできることは、たとえ国が違っていても、一人一人が世界の現状と課題を把握し、そういった課題を解決するという同じ方向に向けて努力していくことだと考える。

2011211　中谷　都愛

私が蘇州科技大学との文化交流会で学びたかったことは、文化の違いである。中国について知る機会はあまりなかったが、中国の現状や直面している問題などを知ることができ、すごく興味深い活動であった。また、今回のプレゼンテーションの内容が、今世界で意識されてきている「SDGs」であり、日本が環境を守るためにどのような取り組みをしているのかを調べたいと思っていたので、より一層興味を持って参加することができた。

文化交流会を通して、文化の違いを学ぶだけでなく、蘇州科技大学の学生の皆さんが日本を好きでいてくれている気持ちを知ることができて、お互いに尊重しあえるような活動となった。また、私たちの地元で環境を守るために取り組まれているものを学ぶことができ、日常生活でも意識して自分にできることを探していこうと考えるようになった。

こういった活動に参加すると、私たち自身の生活にしか目線を向けてこなかった今までよりも視野を広げて多くの国のことまで考えることができるとともに、他の国のことだけでなく日本を深く知れるきっかけとなると思われる。経験がないことにも進んで挑戦することが大切であると気づくことができた。

2011210 永江　二菜

蘇州科技大学との交流において最も印象に残っているのは、蘇州科技大学の学生の皆さんが身近で行われている様々な取り組みに積極的に目を向け、それを取り入れた生活をされているということが感じられたことです。リモートでの交流でしたが、彼らの積極的な姿勢から多くの刺激をもらいました。今後、私も地元の特徴や様々な取り組みなどについて、今以上に目を向けた生活をしていき、SDGsについてより深く考えていきたいと強く思います。また、蘇州科技大学の学生の皆さんは経験談を多く取り入れた内容の発表をしてくださいましたが、このことから、相手に伝わる発表とはどのようなものかということについても学ばせていただきました。このように、非常に多くのことを学ぶことができ、今回の交流会は大変意義のある交流会であったと感じています。

今回のこの経験を今後の生活や学びに活かしていきたいと強く感じました。このような貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございました。

2011260 原田　真奈

1. 学びたかったこと

私が蘇州科技大学と交流をして学びたかったことは主に2つある。

①中国と日本の考え方や行動の相違点：

人間はそれぞれ異なった考え方をしているように、国もそれぞれ異なった考え方をしており、それをもとに活動している。そこで、他の国の様々な考え方を取り入れて日本でも活用できればよいと考えた。

②中国の大学生はSDGs達成に向けてどのような取り組みをしているのか：

現在、持続可能な世界を実現するために、一人一人が今までの行動を変え、生活してる。私の学校支援ボランティア先である小学校では、四年生の子どもたちが学校全体に対して「節水」を呼びかけ、どれだけ無駄遣いをしていたのか分析するという活動を行なっている。これは世界の環境を守るために大切な行動である。このような姿を見て、私も何か役に立ちたいと思い、中国の大学生はどのような取り組みをしているのかを学びたいと考えた。

2. 学んだこと

私は蘇州科技大学との交流を通して主に2つのことを学んだ。

①日本と中国のいじめに対する考え方の違い：

日本の学校では「いじめ」を絶対にしてはいけないと強く言われている。しかし、中国では、「いじめ」に対する危機感や「いじめ」の重大さがそれほど大きくないようであった。このことから、日本と中国との考え方の違いについて学ぶことができた。

②環境に対する取り組みを広めていくことの重要性：

蘇州科技大学の学生の皆さんの発表は環境に関することが多かった。よって、中国では環境について積極的に取り組みがなされていると考える。レンタルバイクなど中国で使われているものは私たち日本においても使われている。このように、私たち学生が有効だと考える環境の取り組みを広めていくことによって中国も日本もそして他の国も持続可能な世界になると感じた。

3. 後輩に伝えたいこと

日常生活の中でレジ袋をエコバッグに変えたり、プラスチックゴミを出さないようにしたりといった活動を一人一人が行なっている。こういった活動は、他国ではどうなのかと考える機会を持つことができるのが交流会である。交流会を通して考え方や行動を変えてみよう、他の国と協働してやってみようということにつながる可能性がある。そこで、ぜひ皆さんも交流会に出て今まで持っていた考え方を変えたり広げたりして欲しいと考える。そうすることによって、未来が明るくなるだろう。

1811519 梅﨑　竜亮

蘇州科技大学との交流会を実施する前に、私たちはまずSDGsについて学んだが、このことにより、私達が普段何も思わないことが、地球や人を苦しめ、今後未来を担っていく人たちに迷惑をかけているのだということに改めて気付かされた。また、私がSDGsについて調べる中で、SDGsの各目標を簡単に達成できる国と達成するのが困難な国とがあることにも気付いた。例えば、私たちの国では、水が飲めるのは当たり前で、誰しも当然のように水道水を飲んだり水道水でうがいをしたりする。しかし、アフリカでは、水を飲むだけで小さな命が失われることもある。このように国によって大きな差が存在している。

実際に蘇州科技大学の学生の皆さんと交流することで、中国と日本の間にもSDGsの達成度の違いが存在していることが分かった。日本は水や教育の質などは保証されているが、男女差別が深刻化している。また、様々な差別やいじめが社会問題にもなっている。一方で、中国では、蘇州科技大学の学生の皆さんの発表が主に自然を大事にするという部分に着目していたことからも分かるように、豊富な自然を有しているものの環境汚染という問題を抱えている。さらには、貧富の格差が大きいという問題もある。

今回の交流会を通して、SDGsを自国のみならず世界的な視点から捉え、達成に向けて努力していくことが大切だと再認識できた。SDGsを全て達成するのは難しいが、国同士が協力し合って達成への方策を模索することで、きっと今よりも良い世界が実現できるであろう。私達一人一人がSDGsを他人事とせず真剣に向き合い、私たちの子孫に明るい未来を届けることが重要である。

第11回　東アジア文化交流研修（オンライン）プログラム

奈良学園大学　社会・国際連携センター

日　時　2021年11月30日（火）　14：45－16：15（14：30～ zoom 接続）

進行方式　ZOOMによるオンライン交流

テーマ　グローカルSDGs
※SDGsというグローバルな目標について，自分自身，大学および周辺地域といった身近な（ローカルな）取り組みを取り上げ，発表・討論する。

目　的　日本と韓国におけるSDGsへの取り組みについて交流・共有することを通して、日韓間の文化的共通性と差異性について知り、異文化理解を促進する。

プログラム

タイムスケジュール	時間配分（分）	内　容
14:30-		ZOOM接続確認
14:45-14:50	5	開会の挨拶　李 吉遠（東亜大学校 国際専門大学院　教授 ）
14:50-15:35	45 5分/1組	プレゼンテーション　進行：堀内美由紀（奈良学園大学　保健医療学部　教授） 1. 横山 菜摘（奈良学園大学　人間教育学部） 『海の豊かさを守ろう-海の生き物たちに居場所づくりを-』 2. イ ジウォン・キム ミヨン・ソクソンヒョン・イ チャンフン・パク ウフム（東亜大学校） 『ゴミを減らすための日韓の企業と人々の努力』 3. 黒木 拓斗，尾川 涼夏（奈良学園大学　人間教育学部） 『食品ロス』 4. 守安 桃代（奈良学園大学　人間教育学部） 『学校の多様性』 5. オオバ ナナミ・パク ジェヨン・ファン ジミン・ジョン ヨンジイェ（東亜大学校） 『人や国の不平等を無くそう-男女差別-』 6. ソン ミンチョル・チョ ヒョンジュン・パク イェリン・ユ ジェヨン（東亜大学校） 『韓国の気候変動と対応方案』 7. 井上 祐（奈良学園大学　人間教育学部） 『SDGsとICT教育』 8. 西平多瑛・山口夢輝・木下紗希・関谷奈々・森美由貴（奈良学園大学　保健医療学部） 『在留外国人の健康&外国人看護師との協働』 9. キム ジウォン・キム テヨン・チョン ジフン・アン ソンミン（東亜大学校） 『貧困と飢餓の問題について』
15:35-16:00	25	質疑応答・意見交換　進行：進藤晃彰（奈良学園大学 保健医療学部 4年）
16:00-16:10	10	講評 李 吉遠（東亜大学校 国際専門大学院　教授 ） 講評・閉会の挨拶 善野 八千子（奈良学園大学 社会・国際連携センター長、人間教育学部 教授 ）
16:10-16:15	5	記念写真・閉会

学外より参加いただく方：河昇彬（日韓国際会議同時通訳・翻訳士，韓国外国語大学 日本研究所 研究員）
山川友基（読売テレビ放送　報道局ニュース統括，解説委員）

＊コメントを頂きます。

東亜大学校とのオンライン文化交流会

人間教育学部　教授　青山　雅哉

2021年11月30日，今回で11年目を迎えた韓国の東亜大学校との文化交流会が開催されました。

これまで、本学に受け入れている中国の連携協定大学からの特別聴講生と本学学生が共に韓国の東亜大学校に訪問し「日中韓の国際文化交流」としてつながりを深めてきた歴史があります。しかし，昨年度につづき現状においても依然としてコロナ禍の状況が収まらず、今年度もオンラインでの交流会を行うことになりました。今回のオンライン文化交流会には，東亜大学校からは17名，本学からは両学部の10名の学生が発表者としてプレゼンを行い，その他にもオーディエンスとして双方150名を超える学生達と教職員が参加しました。

交流会は，東亜大学校国際専門大学院の李吉遠教授の開会のご挨拶に始まり，メインとなるプレゼンのテーマでは東亜大学校からは「ゴミを減らすための日韓の企業と人々の努力」「人や国の不平等をなくそう - 男女差別 -」「韓国の気候変動と対応方策」「貧困と飢餓の問題について」の4つのテーマで、奈良学園大学からは「海の豊かさを守ろう - 海の生き物たちに居場所づくりを -」「食品ロス」「学校の多様性」「SDGs と ICT 教育」「在留外国人の健康＆外国人看護師との協働」の5つのテーマで発表されました。

今回の交流会の目的として、日本と韓国における SDGs への取り組みについて互いに考えていき、この交流を通して日韓間の文化的共通性や差異性について理解を深めていくことができればと提案されました。各プログラムは持続可能な開発目標（SDGs）というグローバルな目標をテーマとしたことから、ごみや食品ロスの問題、気候変動、健康、ジェンダー平等、人権、貧困や飢餓、質の高い教育など多方面に及んだ発表となりましたが、それぞれの環境から身近に関わる事柄や情報、さらに地域や国の取り組みなどから SDGs に関わる内容が発表され、両国間での共通点や相違点について様々な気づきや学びを深めることができるものとなりました。発表時には両カ国文字によるスライド画面が工夫され、それぞれの主張が伝わりやすくなったこともあり、プレゼン発表後の「質疑応答」では、発表内容に対する質問や意見交換が相互に積極的に行われ大変有意義な交流会となりました。オーディエンスとして多くの本学学生が参加しており、この交流会が学生達にとっての学びの場ともなりました。

発表会の後日に本学参加学生達との振り返りを行いました。学生達の感想にはテーマに沿って準備するためにこれまであまり知識のなかった SDGs への取り組みについて様々に学ぶ機会を得たこと、オンライン上ではあるが韓国の学生達と直接コミュニケーションをとることによって世界とのつながりを身近に感じ取ることができたこと、さらに韓国での文化や生活、環境さらに異なる価値観などを知る機会となったことでその多様性に気づき自らのアイデンティティーを見直すきっかけとなったことなど、この交流会に参加したことで学生達には達成感とともに大きな自信と学びに向けた積極性をもたらすことになったように思います。

将来にわたり両国の学生達が信頼し互いを認め合って協働する環境を育み、持続可能な未来を築いていくことを期待しています。

令和3年度
東亜大学校との国際交流会 を終えて

保健医療学部　教授　堀内 美由紀

昨年に続きオンラインでの開催となった東亜大学校との交流会は，「SDGs」という共通のテーマで，両校合わせて9題が準備され発表が行われました。質疑応答の時間には，長く本学学友会の会長を担った学生が司会を務めました。

このテーマについては，世界が取り組む課題について学ぶ機会が，これからの社会を担う学生たちにはよい機会と考え，先行した蘇州科技大学との国際交流会計画の際に提案し，東亜大学校との交流会でも採用することになりました。本学の建学の精神である「高度な専門学術知識に裏付けられた，実践力を有する有能な人材を教育・養成し，地域社会及び社会全体の発達・発展に貢献する」にも沿うものと考えました。

本交流会ではインターネットを活用した「ZOOM ミーティング」を使いました。コミュニケーションツールの多様化は，グローバル化の要素でもあります。本学の ICT を活用した教育活動の推進は COVID-19パンデミック以前より掲げられていましたが，2年にも渡る with コロナの教育現場で急速に環境が整ったことは，本事業の大きな推進力となりました。また，近年は，遠く離れた人と容易にコミュニケーションが取れますし，瞬時に地球の裏の様子を伺うことも，そこで配信された情報を多くの人と共有もできます。この状況は，当然のことのように学生たちも理解していますが，「オンライン交流」という「双方向」かつ「リアルタイム」で，海外の大学生たちと調べたことを発表しあい意見交換をした実体験には，大きなインパクトを感じた様子でした。

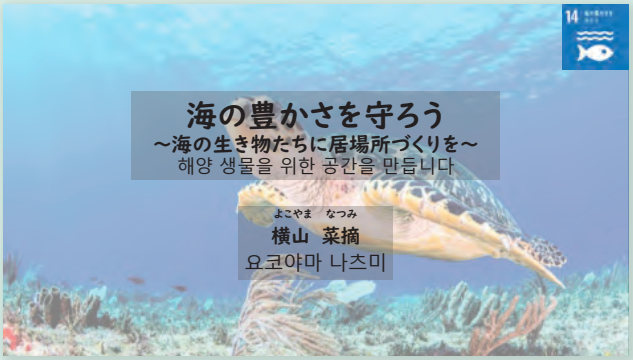
その一方，グローバル化，つまり，人やモノや情報の移動の境界線がなくなることには，COVID-19など感染症拡大の他，人口分布が偏ったり，地域格差が広がったり，さらに，独自の文化が薄れたり（文化の均一化），負の側面があります。それら負の側面の対応と SDGs との間には深い関係がありますが，その議論に至ることはができませんでした。

少し余談を挟みますが，15世紀半ばから17世紀半ばの大航海時代は，グローバリズムの先駆けでした。コロンブスが率いるスペイン一行が，ヨーロッパに感染症を持ち込んだことや，アメリカ大陸に持ち込んだインフルエンザや麻疹，そして天然痘の大流行を引き起こし，インカ帝国では1000万人の人口が6万人になるなど，多くの原住民が命を落としたことはよく知られています。現在は，当時とは比べものにならないほど，移動の速度が上がっていますから，感染症の広がりも猛スピードです。私たちは，COVID-19のパンデミックで，先に述べた「グローバル化の負の側面」を目の当たりにしたわけです。人類が目指す開発（SDGs が掲げる目標に代表されるような）が，真に人々の生活を豊かにするためには，より多くの人の中で議論する必要があります。COVID-19に立ち向かった経験が「大変だった」に留まらず，学生たちの振り返りにもあるように，この交流会は，そうした議論の場に立つひとつの機会であり，ここから，それぞれが「考えて」「行動」して欲しいと願います。本交流会での気づきや学びがいい形で発展できるよう私たち教職員も「考えて」「行動」できるよう努めていく必要があるでしょう。

隣国である韓国，日本との歴史の中で起こったことについて，政治的な議論は，現在も続いていますが，韓国東亜大学校の学生の皆さんは日本に関心を持ち学んでいる方々ばかりで，本学の学生たちの韓国への関心を高めてくださいました。今後も発展的な交流が続けられたらと思います。

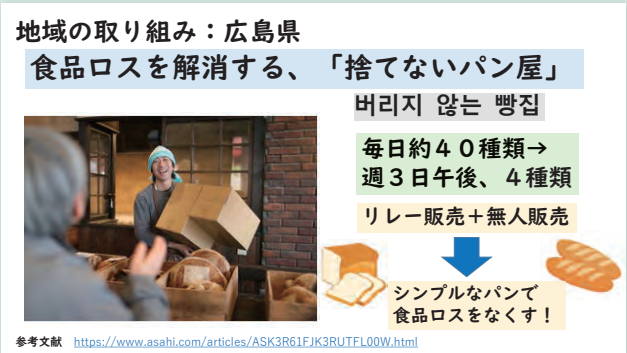
海の豊かさを守ろう
-海の生き物たちに居場所づくりを- PPT

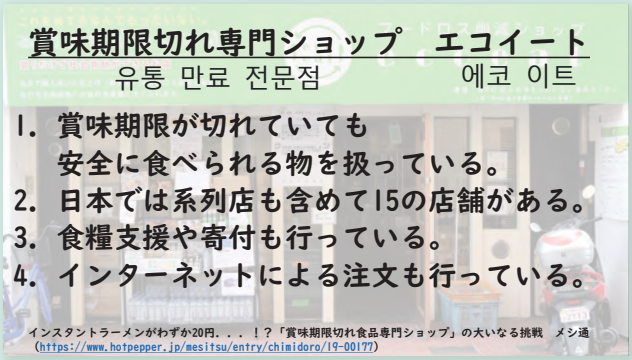
人間教育学部　1911311　横山 菜摘



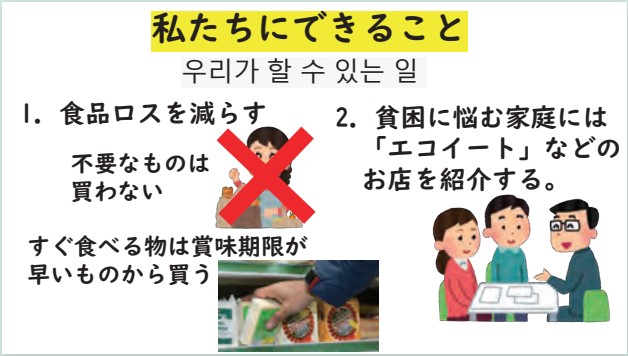
食品ロス PPT

人間教育学部 1911313 黒木 拓斗
人間教育学部 1911427 尾川 涼夏





エコイートはどれだけ安いのか？
에코 이트는 얼마나 싼가?

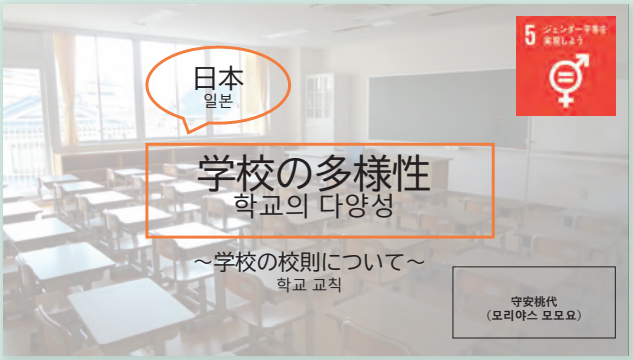

私たちにできること
우리가 할 수 있는 일
1. 食品ロスを減らす
不要なものは
買わない
すぐ食べる物は賞味期限が
早いものから買う
2. 貧困に悩む家庭には
「エコイート」などの
お店を紹介する。

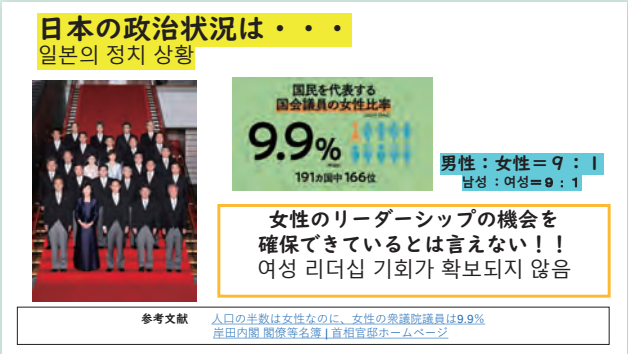
私たちにできること
우리가 할 수 있는 일
EAT ME FIRST
てまえどり
앞을 잡다
使い切る工夫
다 사용하는 궁리
過剰除去を減らす
과잉 제거를 감소

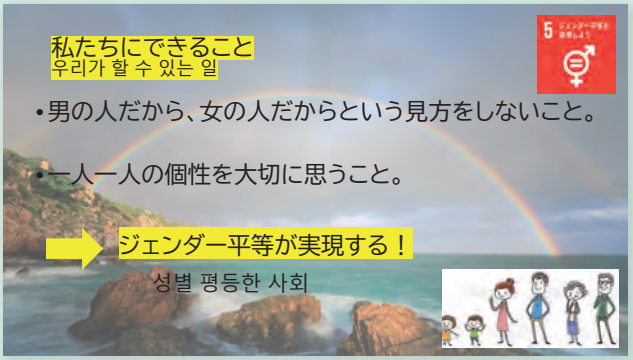
教師としてできること
給食指導
급식지도
食べる時間の確保
먹는 시간 확보
児童によって
食べられる量は違う！！
児童に合った量で、
残さないように！

学校の多様性 PPT

人間教育学部　1911416　守安　桃代

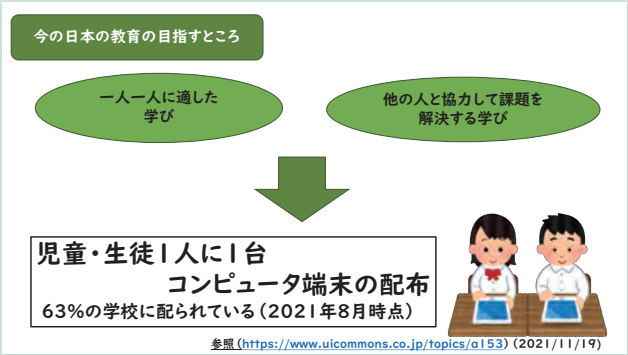


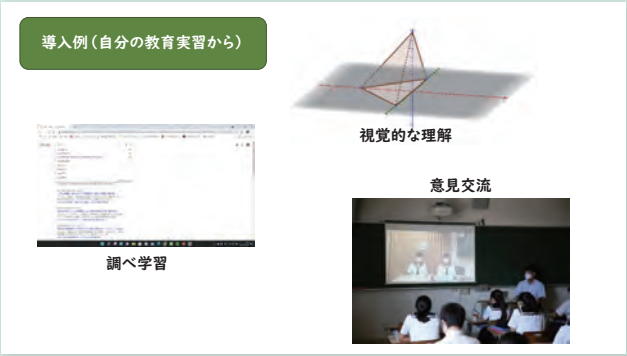


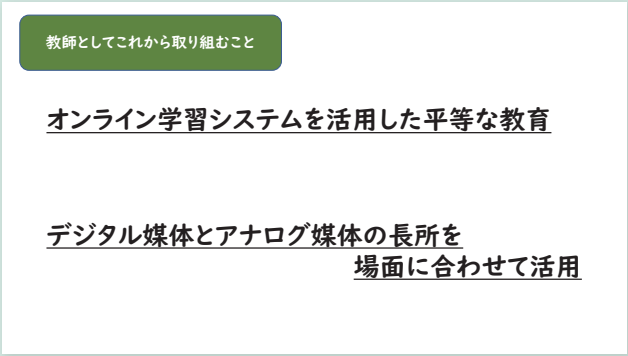


SDGsとICT教育 PPT

人間教育学部　1911403　井上　祐

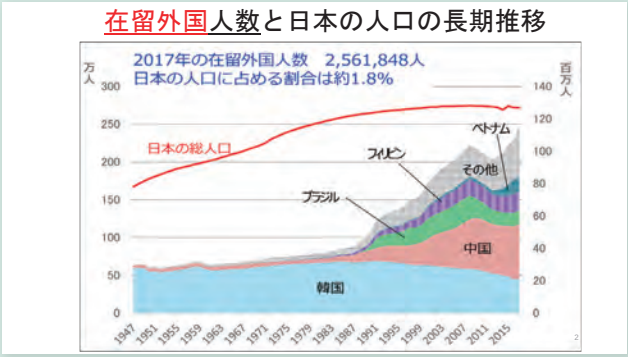






在留外国人の健康＆外国人看護師との協働 PPT

保健医療学部 1831234 西平 多瑛
保健医療学部 1831140 山口 夢輝
保健医療学部 1831214 木下 紗希
保健医療学部 1831223 関谷 奈々
保健医療学部 1831239 森 美由貴



外国人が医療を受ける上で困難なこと

- **言語が壁となり**受診を断念する，情報が十分に得られない
  - ⇒医療通訳不足，家族や友人による通訳の限界
  - ⇒災害時に対応できる病院など情報不足
- 食事やシャワー，など**文化・習慣**の違い，信仰への理解不足
- **「外国人」という理由で差別**されていると感じる
  - ⇒インフォームドコンセント不足＝精神面での負担
- **制度**の複雑さ
  - ⇒医療費への不安，医療保険システムの理解
  - ⇒インフォームドコンセントが十分でない

対策：病院組織・看護師として

- やさしい日本語の使用
- 医療通訳の積極的な配置（への働きかけ）
- 多様な文化の受け入れや理解に対する職員への教育
- より丁寧なインフォームドコンセント
- 医療費など相談窓口の整備
- 多言語による資料作り

外国人看護師が抱える問題

- 看護師の役割の違いへの戸惑い
- 日本における自身の役割に対するアイデンティティの揺らぎ
- 言葉の壁により自分が理想とする看護が展開できない
- 自己効力感が高められない
- 日本の看護師国家試験の合格
- 職場のサポートや待遇に格差がある

対策：病院組織・同僚として

- 日本で働きたいという思いに寄り添う
- やさしい日本語
- 積極的なコミュニケーション
- 仕事と共に，学習や日常生活のサポート
- 仕事の分量や内容を調整
- 日本の文化や看護について丁寧に説明する（押しつけず理解を得る）
- 適正な評価/フィードバック，待遇を含む支援体制の整備

だれひとり取り残さない医療の実現

- お互いの文化や価値観を理解する
- 多様性とどう向き合いながら協働するのかを考える
- 積極的なコミュニケーション
- 多言語対応＆やさしい日本語に関する日本人の学習
- 災害大国日本で暮らす上でのアドバイスなど啓蒙活動へ参加

東アジア文化交流研修（オンライン）プログラム 事後レポート

1911311 横山　菜摘

〈学んだこと〉

私がこの交流会で学んだことは、異なる国籍でも同じテーマで語り合うことで分かり合えることもあるということ。遠く離れた場所にいる私たちがこのような機会を通して、SDGsについて語り合えたことで日本だけの考えだけではなく、韓国の考えも踏まえて考えることができた。文化の違いなどがある中でも、一人一人が大切にすべきものは同じという事を実感することができた。

また私は、韓国の文化や環境への取り組みについても学ぶことができた。交流会の発表の中にも、日韓の比較した情報が提示されていた。日韓で異なることもあったが、その中でも同じ考えや似ている部分が多々あった。お互いの国の相違点だけに着目するのではなく、共通点にも目を向けることで、お互いの国の良さを分かり合うことができるのだと学んだ。

〈これからの生活で活かしていきたいこと〉

はじめは、韓国語も話せないし、オンライン上で自分の伝えたい思いを伝えきれるのかが分からず不安だった。しかし、SDGsについて調べ、練習を積み重ねていくことで、自然と自分に自信を持てるようになった。そして何よりも、仲間と協力して、取り組みを進めたことで、お互いを励まし合いながら、協力することができた。このような経験を今後に活かして、色々な場所で出会う仲間と協力して自分自身の成長に繋げていきたい。

また、この交流を通して、SDGsの取り組みについて多くの知識を得ることができた。自分たちにもできることがあるのだと知り、その知識を次は、教員になってから出会う子供たちに伝えていきたいと思った。自分の学びだけで終わるのではなく、次の時代に繋げていくことが大切であると考えた。日本や韓国だけに留まらず、世界にも目を向けて、SDGsについて考えていきたい。

1831234 西平　多瑛

・東亜大学校との国際交流についての感想

東亜大学校との国際交流に私は今回初めて参加したが、「SDGs」という世界共通の課題を発表し合い、共有できたことはとても有意義であった。特にジェンダーの問題では、日本にはないが韓国にはある徴兵制とその男女差別について新たに知ることもできた。ジェンダーとの関わりはほとんどなく、どこか他人事のように捉えていた部分もあったが、今回の発表を通して、ジェンダー問題および男女差別を軽く見てはいけないこと、男女差別をなくすために私たちが今できることは何かと改めて考えるきっかけになった。SDGs目標2では、韓国の食糧自給率は年々減少しており、1968年と比べると2019年は約30％以上も下がっていることが発表を通して分かった。そのため韓国ではドローンを活用した農業や、児童学習空間の支援（韓国の子どもたちに食糧を提供する）などを行っていることもわかった。また、毎年米5万トンを食物危機国に支援しており、2018年では15カ国もの国に支援していることが発表を通してわかった。飢餓問題は深刻であるため、食糧危機に面している国への支援は重要であり、国際協力機構（JICA）によって実施されている日本の政府開発援助（ODA）による二国間援助（技術協力）や、国連唯一の食糧支援機関であるWFPなどへの援助などについて考えなければいけないと思った。

・SDGsの目標を達成するために私たちにできること

今回の発表を通して私たちにできることは、より多くの人に世界が直面している問題およびそれを解決するためのSDGsについて知ってもらうための啓蒙活動だと考える。SDGsについては近頃メディアでも注目され始め、テレビなどで特集されるほど話題になっている。また、私が通学に利用している電車では、外装から内装まで全てがSDGsになっているものもあり、興味がない人、SDGsについてあまり知らないという方にも目に留まるようになっている。このようにさまざまな方法でSDGsについて発信されているが、17の目標を達成することはそう簡単なことではない。今回の東亜大学校との国際交流を通じて互いの国の直面する問題や解決方法について学ぶことができたが、今回の発表をこの場で終わらせるのではなく、より多くの人に知ってもらい、17の目標を達成するために私たちにできることを一人一人が考え、行動できるように広めていく必要があると考える。

1911313 黒木　拓斗

1. 学びたかったこと

私が東亜大学校との国際交流会で学びたかったことは、日韓の「文化の違い」と「SDGsについての取り組み」であった。

「文化の違い」については、私自身、以前から海外の文化や習慣などに興味を持っていたが、交流の機会がなかったため、本交流会を通して少しでも海外の文化を知りたいと考えていた。また、私が住んでいる地域は様々な国籍の方が住んでいるため、よりコミュニケーションを取れるように学びたかった。

「SDGsについての取り組み」については、今回の交流のテーマがSDGsであったため、日本でも最近重要視されていたので、日本での取り組みを深く知るきっかけになると考えた。また、SDGsは世界規模での取り組みであるため、他の国の取り組みと比較することで新たな考え方ができると思い、本交流会に参加しようと考えた。

2. 学んだこと

私は、東亜大学校との国際交流会で、「日本語の難しさ」と「SDGsについての取り組み方」について学ぶことができた。

「日本語の難しさ」については、今回の国際交流会は日本語でのパワーポイント作成や発表であったため、私たちは、日本人同士でも難しいと思うことがある日本語をどうすれば伝わりやすくなるか、構成や文章表記が難しかった。それでも、東亜大学校の方は私たちの発表を真剣に聞き、質問してくれたり、楽しく発表や交流をされたりしていたため、文化は違っていても伝えたい気持ちがあれば言葉の壁を越えて伝えられることを学んだ。そして、私たちは今までよりも日本語の難しさを理解し、異文化交流の際には相手に伝わりやすい表現や発表をすることが大切だと学ぶことができた。

「SDGsについての取り組み方」については、私はSDGsのテーマ12「つくる責任　つかう責任」の食品ロス問題について発表を行った。このテーマは、日本だけでなく世界でも起こっている問題であるため、東亜大学校の方も比較的分かりやすいテーマであったと考える。毎日大量の廃棄が行われている現状を知って、食品ロスを解消する日本の取り組みをいくつか紹介することで、さらに現実性を持たせることができたことは良かったが、もう少し交流会の時に韓国側の取り組みも詳しく聞くことができると、より交流の内容が深くなり、様々な考えができるようになると感じた。今後、また交流する機会があれば、自分が発表するテーマについて、自国だけでなく他国の実態も踏まえたスライドや発表ができるように準備し、他国と交流する利点を活かしていきたいと考えた。

3. 後輩に伝えたいこと

国際交流会をしていなければ、日本のことしか知れてなかったため、一つの視点でしか物事を考えられないが、このように国際交流をすることで、海外の文化を知ったり、日本の文化を改めて理解できたりするため、多くの視点で物事を考えることができると思う。また、発表することを通して、自分の考えを相手に伝わるように話す力や、相手の言葉を聞く力も身に付くため、普段の生活で欠かせないコミュニケーション能力の向上にも繋がる。交流会だけでなく、様々な発表に挑戦し、大学での学びを将来に繋げていってほしいと考える。

1911427 尾川　涼夏

1. 調べていく過程で学んだこと

韓国の学生とSDGsについて交流会を行うと言うことで日本や世界でどのような取り組みが行われているのかを調べたが、この機会がなければ知らないままになっていたことも多くあったと感じた。食品ロスをなくすために、海を守るために自分達に何ができるのか等を調べ、考えを深めることで、交流会に向けて自分の意見をまとめられるとともに、異なる言語を話す同士でどうコミュニケーションを取るか、相手を常に考える取り組みができたことが良かったと感じた。

2. 交流会の中で学んだこと

日本では食べ残すことが失礼だとされているが、韓国では礼儀として食べ残すことが当たり前になっていることや、逆に韓国と日本でジェンダーの考え方はほとんど同じだということ等、互いの国の相違点を知ることができて良かったと感じた。日本の文化に慣れていしまっているとそれが当たり前の価値観となってしまうが、他の国の人の考え方や、文化の違いを知ることで自分の視野を広げることにも繋げられたと思う。

また、環境を守る為に、排気ガスを削減するために日本では電気自動車の普及が広まってきたが、韓国ではさらに環境に優しい水素を使って自動車を動かすような技術が出てきているなどの新しい技術についても交流できたことが良かったと感じた。

1911416 守安　桃代

【参加を考えた理由】

私は、元々海外の人と交流したいと思っていた。その理由は、最近日本では多くの外国籍の人たちが生活していることから海外の文化を学び、教師になったときに海外のルーツを持った子ども達と接する際に役立たせたいからである。また、自分の視野を広げるためにも、東アジア文化交流研修に参加し韓国の人たちと交流して、考え方や文化を知りたいと思った。

【テーマ設定の理由】

今回は、世界共通のテーマ「SDGS」の17の目標から1つ選択をして、発表することを聞いたときに、韓国の人たちと同じテーマについて考えることができることにとても魅力を感じた。そこで私は、教育実習に行った際に私が中学生の頃と校則が変化しており、「ジェンダー平等」が実現しつつあることを感じた。具体的には、女子だからセーラー服、男子だから学ランという校則がどちらを着ても良いという校則に変化していた。このことから日本では女性差別やジェンダーの問題は少しずつ無くなってきていると思うが、韓国ではどのような取り組みによってジェンダー平等を実現しようとしているのかを聞いてみたいと思い、テーマを設定した。また、韓国でも制服があることから、学校の制服や校則については馴染みがあると考えた。そして、ジェンダー平等が実現するために、私にできることを見つけたいと考えた。

【東アジア交流研修を通して学んだこと】

当日はとてもドキドキとワクワクした気持ちでいっぱいだった。韓国の人たちは、とても明るく、実際に会って話してみたいと思った。互いに質問をし、交流する場面もありとても充実した時間でした。韓国の人たちもジェンダー平等について発表してくれた。その中で、男性の兵役の義務や女性専用車両はあるが男性専用車両はないなどの男性差別のことを知った。そのときに女性差別だけではなく男性差別というも起こっていることを実感した。韓国が日本と似ていると感じた部分は、男性は外で働き、女性は家事をする考え方があるという点である。日本は少しずつこの考え方は減ってきていると思っていたが、韓国の人の話を聞いて、世界の国と比べるとまだまだだということを学んだ。そこで私はこのジェンダー問題は私たちの身近に存在していることを知り、私たちが持つ固定概念を捨て、男性だから、女性だからではなく一人の人として接する大切さを互いに確認することができた。そのことでもっと多様な考え方や行動がしやすいような社会にしたいと強く思った。将来、男性と女性が本当の意味で平等だと言える社会に日本だけではなく世界がなるために、何気ない日常会話を1つ1つ意識したい。

1831140 山口　夢輝

発表を聞き、同じSDGsというテーマで考えていても、問題に対する視点は多様であると感じた。これは、文化の違いが大きく影響していると考える。

外国人が感じる日本人との関わりの困難の1つに「言語」があげられ、多くの文献でも報告されている。これに対して、今回の発表での本学側の対応として、優しい日本語の使用やゆっくり発言することで聞き取りやすくする工夫がされており、これがスムーズに討論会が行われた要因の1つであると考えた。

普通に暮らしていたら関わることのない他国の大学生と交流を持てたことは貴重な体験だった。

1831123 進藤　晃彰

今回、東亜大学校との国際交流を通して、日本と韓国との文化の違いやそれぞれの国が抱える問題など話し合うことができました。2つの国に共通する問題だけでなく異なる問題にも気づくことが多くあり、今後グローバル化がさらに進む現状の中で良い経験となりました。

本題としてあげられていたSDGsについても自分達が身近にある問題に焦点を当て、そして自分達が実現可能な対策を考えることでSDGsに対して興味を持つことができました。

発表では東亜大学校の学生達は、奈良学園大学の発表に対して日本語での質問をたくさんしていてこの交流に対しての誠意が伝わってきました。

コロナ禍ということでオンラインによる交流にはなりましたが、画面越しでの交流でも相手の表情や言葉や気持ちはしっかりと伝わってきました。この時期に自分達でできる交流方法を活用し、さらに国と国の関係性を築き対面で交流できる日を待ちたいと思います。

1911403 井上　祐

・学んだこと

今回の交流会を通して多くのことを学ぶことが出来た。特に学びが深まったのは、今回の交流会のテーマであった「SDGs」についてとそれに対する日本と韓国での取り組み方や意識に「違い」があったことの2点である。私はこれまで大学の授業やメディアで「SDGs」という言葉を耳にすることは多々あったが、どこか他人事と思い、実生活の中で深く考えたり行動に移したりすることはなかった。しかし、準備期間や交流会を通して日本と韓国のSDGsに対する取り組みや実状を知り、学ぶことができた。質の高い教育や貧困、食品ロスといった問題などこれからの学びに大きく繋がった。

また、東亜大学校の学生の方々からの発表では、韓国と日本ではSDGsに対する意識の違いがあることに気付いた。韓国では企業が率先的にSDGsの目標に取り組み、それを宣伝しているため日本よりも浸透していることを知った。企業が自社の取り組みをアピールすることにより好感を与えるだけでなく、SDGsに対する国民の意識を底上げしているのだと考えた。

17の目標には、貧困やジェンダー平等といった人に関する内容や環境保全についての内容などがある。この目標は、持続可能な社会に創っていくだけでなく、世界中の人たちの生活を現状よりもより良いものに発展させることに繋がっていくと考える。環境問題や食品ロスといった課題に対して一人でできる事は微力かもしれないが継続的に続けていきたいと考えた。

・感じたこと

東亜大学校の学生の方々と交流を行って、学びに対する姿勢の違いを感じた。オンラインでの交流で対面より状況が悪い中であるにも関わらず、流暢な日本語でSDGsについて様々な視点から発表されていた。発表の中に自分の考えや根拠となるデータもしっかり入れられていて、学びに対する主体性が感じられた。この様な学びに対する姿勢を自分自身も見習いたいと感じた。また、交流を通して国が違えば考える視点も意識も異なることを改めて実感した。現在は新型コロナウイルスの流行により難しい状況だが、実際に対面で様々な国の方と交流を持ち、自分とは異なった考え方や価値観を自分の中に取り入れたいと思った。

この交流会を機に、もっと様々な情報や知識を身に付けていきたいと感じることが出来た。“Think Globally Act Locally”の意識で世界規模の様々な事に目を向けながら、これから自分が出来る事は何か考え、行動していきたい。

編集後記

早いもので年度末を迎えることになりました。2021年度もコロナ禍のために生活が制限された1年となりました。今日においても、対面での交流が難しい日々が続いております。一方で、2020年度よりオンラインによる会議や交流、授業などが急速に発展し、2年目となる今年度はより発展した使用方法などが確立されてきました。

そのような現状の中、本学の社会・国際連携センターにおいても国際交流を止めることなく実施していくため、昨年と同様にオンラインでの国際交流を試みました。2年目のオンラインとなったこともあり、昨年度よりもスムーズかつ有意義な国際交流を実現することができました。テーマを「グローカルSDGs」として、連携協定校である蘇州科技大学（中国）と東亜大学校（韓国）とZOOMを使用した国際交流を実現致しました。本誌では国際交流の際に使用したスライドや学生が得た学び・感想などをまとめたものになります。この経験は学生の今後の人生に大きな影響を与えていくことと思います。

皆様からご協力をいただき、国際交流記録文集を無事に発刊することができました。ご協力・ご支援頂きました皆様に深く感謝申し上げます。

社会・国際連携センターでは、国内外で活躍できる人材育成の支援を今後も行ってまいります。社会・国際連携センターの事業についてのご理解とご協力を何卒よろしくお願い致します。

社会・国際連携センター運営委員
保健医療学部 講師　吉川　義之

社会・国際連携センター発刊

〒631-8524　奈良市中登美ヶ丘3丁目15-1
Tel. 0742-93-5405
http://www.naragakuen-u.jp

人を支える人になる

奈良学園大学

NARAGAKUEN UNIVERSITY